

## 竹内敏晴の「生きるレッスン」

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
田頭 麻紀子

本論文では、竹内レッスンの創始者竹内敏晴を取り上げる。全三章立てで、竹内の生い立ちから始まり、レッスン、教育活動について描写した。竹内敏晴は、「竹内レッスン」という、からだとことばに重きを置いたレッスンを開始し、そこに集う参加者たちと共に「人と人の生き生きしたかかわり」、「出会い」、「人間になること」を模索した。このレッスンを通して、人と人の真の出会いが生まれると竹内は考える。独自のレッスンを行った竹内敏晴という人物を追いかけて、その主要なレッスンが行われる過程を辿り、先の三つの問いをそのなかで考察した。

まず、第一章では竹内の生涯を描写し、竹内がどのような経験を経てレッスンへ向かったのかを明らかにした。特にその生涯で起こった二つの転回を中心に、人間にとっての「変化」の持つ意味を論じた。続けて第二章では、竹内レッスンの中身を具体的に記述している。レッスンの主眼は、人間のからだを覆う持続した緊張、他者への気づかいなどで凝り固まった「慣習としてのからだ」、自分の歪んだ姿勢、身構え、存在の仕方に気づき、そこから自分のからだを取り戻すことだ。そのために、様々なレッスンが繰り広げられる。野口体操を利用した「ふれる」、「ゆらし」、「息合わせ」に始まる「からだのレッスン」により、レッスン参加者たちは自分の姿に気づき、改めて自分のからだに出会う。発声、歌、詩の朗読、せりふを用いた「ことばのレッスン」では、自分の本当の声や、身の内から動き現われ出たことばに出会う。さらに「呼びかけ」、「出会いのレッスン」、「砂浜の出会い」で「人と人の真の出会い」を模索する。そして、「クラウン」、「仮面のレッスン」、「八月の祝祭」では、自分自身を表現し、自分の新たな一面を発見する。または、他者によって発見される。

最後の第三章は、竹内の教育活動についてだ。学校教育のなかで向かい合う教師と子どもたちのからだを描写し、その姿に反映された時代の病巣、社会の歪みを検討する。また学校演劇の取り組み、子どもに対する竹内の思いを取り上げた。

以上、竹内敏晴の行ってきた活動を見ていくうちに、現代の疲弊したからだたちが、あちらこちらに浮かび上がる。竹内はそんなからだに真正面から向き合い、問答、吟味を通して、その人のいのちを生き生きと蘇らせる。まさに竹内レッスンは、「生きるレッスン」と呼ぶにふさわしい。